

富概念の推移

馬 場 宏 二

経済学における富の概念が、重商主義学説から古典派経済学に至るにつれて、貨幣素材としての貴金属から各種使用価値の堆積へと移ってゆく過程を追う。むろんさほど斬新な試みではない。しかも、富概念の発展と唱えたくとも本質的には変遷であり、学説の系譜と控えようとしても継承関係を明示できない場合が多い。作業としては、諸説の時間的順序に従った羅列だと自称するしかない。

それでもこれは、ペティからスミスやリカードに至る古典派経済学形成過程、未だに明確な図式化をできない過程の一側面である。そして、富概念と価値概念がいわば表裏の関係にあるところから、古典派における価値論成立史を、裏面から照射する手がかりにもなる。その程度の意味は持つであろう。

I. 出発点としてのロール説

富概念を、アリストテレスやラトマス・アクイナスやらに遡ることは本稿の課題ではない。近代資本主義の形成に応じたその変遷を見れば済む。そのためには、エリック・ロールの『経済学説史』⁽¹⁾における簡潔な図式が有用である。

「(経済学的概念の一馬場) 意味を完全に理解しうるためには、その背後にある物的諸条件を検討し比較する必要がある」とし、「歴史的批判的な方法」を自称するロールは、その方法に依って、商業資本主義の段階に至って「富の概念は、使用価値を有する物材から分離され、交換価値を持った貨幣的価値の形をとって再現する」と言う⁽²⁾。

本稿の目的からすれば、ここから出発して良い。つまり、富はもともと使用価値を有する物材の集積だった。それが重商主義時代には金銀つまり貨幣素材とされた。金銀の蓄積は古代にも中世にも目標とされて来たが、商業資本主義の発展がこれに新鮮な刺激を与えた。かくして「高度の貨幣尊重は、重商主義の全部に共通していた」⁽³⁾。ここから古典派経済学つまり産業資本主義時代の経済学への富概念の推移は、貴金属の蓄蔵から使用価値の堆積への回帰に他ならない。

だがロールは、その方法に従って、重商主義諸学説についてももう少し細部に及ぶ把握を示していた。歴史無視が流行る今日、頂門の一針の意味で、それにいささか付き合っておいてもよからう。

その「商業資本主義とその理論」の章は、スコラ主義の衰退、重商主義の特質、プリオニズムと重商主義、トマス・マンと四分されているが、その中でロールは独特の学説整理を示す。重商主義が十四世紀末から現れたと言う説も、中世後期に存在したプリオニズム(以下、重金主義)と十七世紀に現れる輸出貿易の膨張に関心を持つ本来の重商主義とを区別せよと言う説も一面的である。重金主義は重商主義以前から存在した。初期重商主義と後期重商主義で、貿易思想に断絶があるのは確かだが、重商主義としての統一性が壊れるほどではない。「蓄蔵貨幣が形成されたというこ

とは、私的交換と流通の過程における大きな進歩を内包している。それは現物形態での富の蓄積とは本質的に異なる。「それが可能となるのは、ただ富の生産と流通とが、貨幣によって連結され、商人という特殊の階級によって仲介される別個の過程となった場合だけである」⁽⁴⁾。

重金主義を重商主義に含めるが、小区分はあるとする。金銀の蓄積という目的は同じでも、そのための手段が違う。初期には金銀の移動に関する中世的な直接統制であったが、後には輸出超過による金銀増加となり、それを目的に地金の輸出が認められる。この、貿易差額主義 (balance of trade theory) の登場が、重金主義と重商主義を区分する⁽⁵⁾。もっとも、貿易差額主義にも、個別貿易差額主義と総合差額主義があった。まず、貿易相手国つまり為替関係ごとに出超を要求する、取引差額説 (balance of bargaining theory) があり、やがてそれを批判する、総合差額主義が現れる。その代表がトーマス・マン (Thomas Mun, 1571~1641) である⁽⁶⁾。

ロールによれば、重商主義者は貨幣を金銀としたが、実は貨幣と資本を混同しており、「富という言葉は明らかに資本という意味に用いられていた」⁽⁷⁾。因に「資本」はストックであるが、ロールによればマンは「もはや富一般について語りはしないし、貨幣と資本を混同もしない。彼は、通常貨幣の形態をとり、ストックすなわち、剰余をもたらすような仕方を用いられるべき富の一部をはっきりと区別していた」⁽⁸⁾。この時代に剰余をもたらす典型的な仕方が外国貿易であった。…ロールが貴金属輸出に始まり貿易出超に至る循環を、貨幣の投下に始まる資本の自己増殖過程と捉えていることは明らかである。

重金主義から取引差額主義を経て総合的貿易差額主義に至り、その先に産業資本主義の時代を展望する歴史と、蓄蔵貨幣からその動化による貿易差額の獲得すなわち流通面で自己増殖する商人資本、ひいては生産を含んで自己増殖する産業資本へと展開する範疇的發展とを照応させた把握は、なかなか鮮やかである。むしろ歴史と論理の照応という、公式化された図式の機械的適用を疑われる恐れが出てくるほどである。

実際、ロールが取り上げてないことだが、17世紀末から18世紀始めにかけて、トーリー自由貿易主義とホイッグの産業保護主義との対立があり、後に経済の発展を妨げる重商主義と一括して排斥された対象はむしろ後者だったという屈折がある。だが今はこの点には立ち入るゆとりがない⁽⁹⁾。そこで、簡便のためにさしあたり重商主義学説については上記のロールの図式に委ねることとし、マリーン (Gerard Malynes)、ミセルデン (Edward Mysselden)、チャイルド (Sir Josiah Child 1630~1699) 等、個別の重商主義者を取り上げることは避ける。以下ではそのロールが「古典経済学の基礎をきずいた」⁽¹⁰⁾と評したペティから始めよう。

- (1). Erich Roll, *A History of Economic Thought*, London, 1945. エリック・ロール著、隅谷三喜男訳、『経済学説史 上巻』、1951年 有斐閣。
- (2). 上掲書 69ページ
- (3). 同上 77ページ
- (4). 同上 69ページ
- (5). 同上、83、94ページ
- (6). Thomas Mun, *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664. トーマス・マン、張漢裕訳『外国貿易によるイギリスの財宝』1942年、岩波文庫
- (7). ロール、上掲訳、69ページ
- (8). 同上、72ページ

- (9). この対立については、天川潤次郎『デフォー研究』、1966年、未来社、特にその第六章を見よ。力点が少し異なるが、馬場宏二「マーチン“変説”の探索」大東文化大学『経済論集』第85号、2005年7月もある。
- (10). ロール、上掲訳、71ページ

II. ペティ

ウィリアム・ペティ (Sir William Petty, 1623~1687) の成果をロールは高く評価しており、内容的にも一節を割いて結構細かい論点まで、概ね適切に紹介している。ペティを重視したことはロールの大きな長所である。しかし小さからぬ不完全も残る。

たとえば、ペティが労働の剰余生産物が存在することを認識していたのはよいがそれを農業地代に限った、と言う⁽¹¹⁾。ところがペティは、地代を生む穀物と等価で交換される銀に、産銀業者の貯蓄を含めており、それと地代を対照している。つまり、産業一般が剰余を生むことを、農業だけが剰余を生むとする重農学派よりかなり前に捉えていたのである⁽¹²⁾。また、ペティはある箇所で、土地と労働を合して価値の共同決定因だとしていたが、これは交換価値と使用価値の混同によるとロールは解する⁽¹³⁾。これは明らかに誤解である。ペティにとって最大の問題は資産としての地価の算定にあり、彼はそれを、地代に「購買年数」を掛けて算出するのだが、地代は土地の総生産物から農業労働者が消費した分を差し引いたものだとする。穀物と銀の換算の場合は、生産に要する投下労働量を価値とする統一的把握がある。全生産物から労働者の消費を差し引く場合には、まず穀物量で計測する意味では重農主義的だが、使用価値的に統一的把握をした上で価値的に換算したのである。混同などしてはいない。因にペティは、この換算を、political economiesの中心的課題だと言う⁽¹⁴⁾。これは管見の限り、この用語－英熟語－の用例の嚆矢である⁽¹⁵⁾。さらにロールは、ペティの労働価値説とリカードのそれとの近似性を指摘している⁽¹⁶⁾が、その指摘は、ロールが、おそらくマルクスに従って、完全無視したマカロックが、とっくに行なっていたのである⁽¹⁷⁾。

しかしわれわれにとっての問題は、ペティの富概念である。因にこれは、ロールが扱うべくして取り上げなかった、軽からぬ論点である。

まず、ペティの名文句に「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」⁽¹⁸⁾、がある。ペティはこれを「われわれの見解」と呼んでおり、同じ文句が前から繰り返されてきたわけではないが、かなり前方に「すべての物は、二つの自然的単位名称、すなわち土地および労働によって価値づけられねばならない」、「土地と労働とのあいだに一つの自然的等価関係を発見しうるならば、われわれはさぞうれいであろう」⁽¹⁹⁾と述べられているから、この名文句はペティの創案と解してよかろう。仮に既成の文句であったにしても、ペティが価値論と関わって独自の意味を含ませ、後にはそれを「ポリティカル・エコノミーズにおけるもっとも重要な問題」⁽²⁰⁾と位置づけたのである。

この句自体は後にまた取り上げることになるが、当面これと関わって注意すべきはホッブズの影響である。ペティは20歳頃に、パリに亡命していたホッブズと、ヴェサリウスの『人体の構造について』を一緒に読むなど深く交流した⁽²¹⁾。その時点では『リヴァリアサン』はまだ書かれていないが、そこに含まれた「物資の豊富についていえば、それは…陸と海とから、神が通常、人類に無償

で与えるか労働に対して販売する、諸財貨に、自然によって限定される」「豊富は…人びとの労働と勤勉にまったく依存」⁽²²⁾する、といった思想は、すでに早熟のペティには伝わったものと思われる。これがすぐ労働価値説につながるか否かには議論の余地があるが、使用価値としての富の生産が労働に依存することは明示しているから、これはペティ理論の源流と言って良からう。あるいはこのホップズ説がヒュームらを介してスミスの労働本源的購買手段説に繋がったかも知れない。

さてペティは、富の実体についての定義的文章も残している。「産業の偉大にして終局的な成果は、富一般ではなくて、特に銀・金および宝石の豊富である。銀・金・宝石は、腐敗しやすすくないし、また他の諸物品ほど変質しやすくもなく、いついかなるところにおいても富である。ところが、ぶどう酒・穀物・鳥肉・獣肉等々の豊富は、その時その場かぎりの富にすぎない」⁽²³⁾。同じことは、少し前の著作にも述べられている。「われわれは、よろしく海外から貨幣をもたらしたり、招来するような諸物品の生産に従事すべきである。というのは、それらは、その国々から、またはいついかなるところからでも、わが国の必要を充足してくれるであろうから。このことは、国内物品の貯蔵をもっては果たすことができない。その価値は、いわば一時的であって、ただそのときその場での価値にすぎないからである」⁽²⁴⁾。

ペティによれば、貴金属も日用消費財も富である。だが耐久性・保存性から言って、貴金属がヨリ重視されるべきである。そして貴金属を獲得するためには、輸出産業を発展させる必要がある。この貴金属は、耐久性があるだけでなく、自国の必要をいつでもどこからでも充足させる手段である。

ペティの位置づけは、歴代の経済学史家を悩ませてきた。時代的には十七世紀後半、重商主義時代に属する。自由貿易思想もちらつかせるから、チャイルドやダヴィナントらとともに、後期重商主義に含める場合もある。しかし貿易はあまり体系的には論じておらず、トーリーなる党派が成立していない時代だから、トーリー自由貿易論者に含めるわけにもゆかない。関心の中心は政治算術—統計的手法を駆使した国民経済の数量的総括—であり、労働価値説もその一環に他ならない。分業の用語こそないが、事実にスミスに一世紀先がけて説いている。内容的には古典派経済学の始祖だといいて良いのだが、スミスはペティからの継承を一切認めていない。

上記富の概念に限って言えば、ペティ説の基調はひとまず重商主義、輸出超過を含みにした貿易差額主義と読める。しかしそれは貴金属の蓄積そのものを目的とするより、必要な消費財の獲得手段として、つまりは購買手段・蓄蔵貨幣・世界貨幣としての貴金属獲得志向であり、しかもそれに合わせて、国内産業を輸出産業に方向づけようとする政策指向である。そうなるとこれはほとんど自由主義的古典派経済学になる。トーマス・マンにおける商人資本を国内産業資本に置き換えたといっても良い。

ペティの富二要因説はその後飛び飛びながら継承されて、結局ペティを完全無視したスミスにはばそのまま現れる。貴金属第一・消費財第二の富実体論は、継承者ダヴィナント、マーチンで逆転し、スチュアートにおける屈折があったものの、これもそのまま古典派に継承される。以下継承者群を一瞥しよう。

(11). ロール、前掲訳書128ページ。

(12). 参照、馬場宏二「ペティ経済学の継承」大東文化大学『経済研究』研究報告18号、2005年5月、のち馬場

宏二『もう一つの経済学』、2005年7月、御茶ノ水書房、247～249ページ。該当箇所は、ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』、1952年、岩波文庫、76～78ページ。

- (13). ロール、前掲訳書、130ページ。
- (14). ペティ、松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』1951年、岩波文庫、133ページ。
- (15). 馬場宏二「ペティと『国富論』」大東文化大学『経済論集』第87巻2号、2006年7月。
- (16). ロール、前掲訳書、108ページ。
- (17). 参照、馬場宏二前掲『もう一つの経済学』262～268ページ。
- (18). ペティ、前掲邦訳『租税貢納論』、119ページ。
- (19). 同上79ページ。
- (20). 前掲訳『アイアランドの政治的解剖』、133ページ。
- (21). 松川七郎『ウィリアム・ペティ』、1967年、岩波書店、127ページ。
- (22). ホップズ、水田洋訳『リヴァイアサン』(二)、1964年岩波文庫、137ページ。
- (23). ペティ、大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』、1955年岩波文庫、50ページ。
- (24). ペティ『賢者には一言をもって足る』、前掲『租税貢納論』所収、193ページ。

Ⅲ. ペティ継承者達

ペティ説の継承を概観するのはかなり厄介であり、体系的に整理することは筆者の手に余る。ここでは、ペティ後比較的早い時期に、ペティの名を挙げながら経済学を論じた三人を取り上げる。彼らは、直接ペティの富概念を論評したのではないが、何らかの意味でペティの影響を受けており、その中で独自の富概念を開陳したのである。

Ⅲ-A. ダヴィナント

ダヴィナント (Charles D'Avenant, 1656～1714) は、統計家であり、この面ではグレゴリ・キング (Gregory King 1648～1714) と並べられるが、経済思想面で重商主義後期の自由貿易派として、チャイルド、バーボン (Nicholas Barbon, 1637～1698)、ノース (Sir Dudley North 1641～1691) らとともにトーリー自由貿易論者と一括される⁽²⁵⁾。彼の著作は全五巻に纏められており⁽²⁶⁾、政治算術論そのものも含むが、大部分は政治算術つまり数値の算定を伴う財政論、貿易論、それに国際関係論である。政治算術論の中⁽²⁷⁾ではペティを斯学の始祖と明示し、その成果を讃えているから、この面でダヴィナントがペティ継承者であることは間違いないが、経済思想の面でもペティに近いところは見受けられる。作家であるとともに政治家でもあったが、経歴上興味深いのは、父の二代目桂冠詩人ウィリアム・ダヴィナントがシェクスピアの婚外子だと言われることである⁽²⁸⁾。

さて、彼の著作集は総計すれば2000ページをかなり越えるから、ダヴィナント経済学に立ち入って見ることはここでは敬遠する。ただし「富」というキーワードを用いて定義した箇所はないようだから、富についてもっとも集中的に論じたと覚しき「外国貿易はイングランドにとって有益であるとの論」⁽²⁹⁾から、彼の思考を掴み出すことにする。

この文はポレクスフェン (Jhon Pollexfen) の「東インド貿易はイギリスの製造業に有害」という文に対する論争文であり、17世紀初頭以来、イギリスは貿易によって、戦争や大火があつたにも関わらず、年200万ポンドの割合で、それも加速度的に、豊かになったと主張する。挙証はまさに政

治算術的な量的増加で、人口・軍備・地代・地価・利子率・税金・船舶・建築・家具・装飾品・宝石から現金にも及ぶ。論敵は、貿易が貴金属を失わせ戦争や災害時に国を危険に陥れると唱えたごとくであり、ダヴィナントはそんなことは事実と反すると一蹴している。問題は、国富は貴金属に限られているのか否かであるが、これについてのダヴィナントの把握は、「人口が多く勤勉で、多様な産業があり、人々が海事に慣れ、良港を持ち、肥沃な土地がある国では、人々は貿易によって富を集め、速やかに金銀を豊かに持つであろう。一国の現実的で有効な富はその国産品だからである」⁽³⁰⁾と云う。また、「貿易が貨幣を生む。貨幣が貿易を生むのではない」とも、「貨幣は実は人々を取り引きに当たって使い慣れた計算器に過ぎない」⁽³¹⁾とも云う。ここまで来れば、富概念はペティの場合以上に使用価値に傾斜していると言って良い。そしてこの富はしばしばストックと言い換えられ、それが貿易を通じて増大すると言うのだから、ロール風に捉えれば、貨幣は価値尺度や蓄蔵貨幣の域を越えて、資本の一環として循環していることにもなる。

ただ、ダヴィナントが経済理論を掘り下げたことはないのかも知れない。具体的な論点では筆力の豊かさを示し、掲げる数値がペティより正確になっていることはしばしばあるが、政治算術の理論そのものを深めたことはなさそうだし、価値論にも比較生産費説にも言及してはいないようである。

(25). 天川前掲書、243ページ。

(26). *The Political and Commercial works of that celebrated writer Charles D'Avenant LLD, Collected and revised by Charles Whitworth, 5vols, London, 1771.* 一橋大学メンガー文庫所蔵。

(27). *Of the Use of Political Arithmetic, in all Considerations about the Revenues and Trade, in op. cit., vol. 1, esp. p. 128.*

(28). P. J. Thomas (1895~1965), *Mercantilism and East India Trade*, 1926, p. 71. 以前からあった説らしいが、Oxford DNB 2004 はこれをムキになって否定している。

(29). *Discourse That Foreign Trade is beneficial to England in The Political and Commercial Works vol. 1.* この文がいつ書かれたかは記されていないが、文中に同じ著者の『東インド貿易論』（アダム・スミスの会監修 初期イギリス経済学古典選書2、パーボン・ノース『交易論』、ダヴィナント『東インド貿易論』、1966年 東京大学出版会）が引用されており、同書の出版は1696年とあるから、この文はそれ以後、ぎりぎり17世紀末に書かれたものと思われる。

(30). *The Political and Commercial works, op. cit., vol. 1, p. 354.*

(31). *op. cit., p. 355.*

Ⅲ－B. マーチン

ヘンリー・マーチン (Henry Martyn, 1665~1721) は中空に霞む孤峰である⁽³²⁾。今日に至ってもなお、経歴・著作の大綱が判る程度で、細部に不明な点が多々残る。大人名辞典さえ、雑誌寄稿を述べながら著書に触れない。匿名の『東インド貿易の諸考察』⁽³³⁾の著者が彼だと確定したのが1983年だが、旧版で没年だけ記していたのに生没年を明記した2004年刊のODNBが、未だにこの著書名を記していない^(33a)。マーチン研究－むしろ言及－は主としてこの著書を対象として行なわれて来た⁽³⁴⁾が、研究史にも奇妙な断絶や忘却が付き纏う⁽³⁵⁾。そうした人物が、著書では徹底した自由貿易を主張しつつ、競争論・分業論機械論・貨幣論ばかりか比較生産費説の提唱に至る高度の理論的成果を挙げながら、他方で『ブリティッシュ・マーチャント』誌の主要論客として、産業保護主義的

重商主義を唱えて、ユトレヒト条約に伴う英仏通商条約の批准を阻止する実践的成果を挙げ、その功で、トーリー政権任命のチャールズ・ダヴィナントが死去した後、ホイッグ政権の手で輸出入監視官(Inspector-General of Import and Export)に任命されながら、本人も在職中に死去して借金を残した。— これだけでも一筋縄で括れる対象でないことは判るであろう。

読者達は一様に理論水準の高さに感銘を受けている。マカロック、マルクス、マントウらは異口同音に、マーチンの分業論が4分の3世紀後のアダム・スミスより優れていると讃えた⁽³⁹⁾。だが彼らも、比較生産費説や貨幣信用論も含む理論体系全体をコナした訳ではないし、重商主義への思想的屈折も捉えていない。そして何より、匿名の稀覯本で、しかも再版名が全く異なり、マカロックによる覆刻もまた稀覯だった⁽³⁷⁾ために、そもそもマーチンを読んだ人が少ない。したがって彼は経済学史上おそらくもっとも徹底的に忘れられた論客となり、それゆえ上記小数の読者に対する影響を除けば、明示的な痕跡を残さなかったのである。

以下論点を絞る。まず、マーチンのペティ継承。

著書の冒頭にいきなり、「この文章に示すことの多くは、世に受け入れられた見解とは反対のことだから、明白な証拠なしに発表さるべきではない。それゆえ、著者は、読者を喜ばせるような比較級や最上級の語を使う代わりに『政治算術』の方法に従って、数・重量・尺度で表現しようとした。幾何学の原理ほどに確かなことでなければ確信を以て語る者ではないと思ってもらいたい」と挑戦的な方法宣言がある⁽³⁸⁾。ペティ『政治算術』の方法宣言を下敷きにしていることは明らかだが、実際の叙述が政治算術的であることも明瞭である。

雑誌『スペクテイター』への寄稿が、推測された限りで3ないし4回あるが、その中ではペティの名や著書を繰り返し挙げている⁽³⁹⁾。さらに、政策思想としては逆になる重商主義的文書、『ブリティシ・マーチャント』への寄稿とされる叙述⁽⁴⁰⁾や、輸出入監視官としての報告も政治算術的であり、ことに公的報告文は貿易収支額の正確な把握のための提言やそれに伴う彼自身の困難を述べている。この点ではダヴィナントの公的報告文と軌を一にする⁽⁴¹⁾。

さて、そのマーチンが如何なる富概念を語ったか。

『東インド貿易の諸考察』第2章「インド製造品に対する地金の輸出は、ヨリ小さな価値をヨリ大きな価値と交換することである」で言う。「個人のものである国のものである、真の主要な富は肉やパンや布や家屋や生活必需品同様便益品であり、これらのいささかの洗練改良、安全な所有と享受である。それゆえ、貨幣は、これらを購入し得るために富と見なされる。」「したがって地金は二次的従属的であり、布や製造品が現実で主要な富である」⁽⁴²⁾。

富概念がペティ同様二重になっているが、貴金属と一般的使用価値との順位が逆になっており、スミスやリカードの、古典派的富概念に接近していることは明らかである。その点ではダヴィナントと同様であるが、マーチンの方が概念化している。

因みにこの章の論理には、価値概念上の混乱が見られる。章題は貴金属の輸出がヨリ大きな価値を得ると言う、貿易促進の主張であるが、前方ではインド製品の輸入は同じものの国産品より安いからヨリ小なる価値との交換だとか、再輸出すればヨリ多くの地金が得られるとか輸入品の競争で国内産業の生産性が上がるから輸出競争力が増すとか、いずれにせよ貿易を通じて貴金属が増え

価値増殖が行なわれることに帰着する議論を述べているのに、上記引用は、富として二義的なものを放出して一義的な富を得るのだからより小さい富によるより大きな富の獲得だ、となる。同じ Value という語を交換価値の意味にも使用価値の意味にも使っている。この混同のゆえにマーチンは、労賃水準の高低でなく単位労働コストの高低を基準にした比較生産費説の事実上の始祖となりながら、投下労働量を基準とする労働価値説については何の貢献もできなかったのである。

- (32). とりあえず筆者の主要なマーチン論を一括しておく。「『資本論』の一文献」『大東文化大学経済研究所 Working Paper 22, 2002年9月、のち馬場宏二『マルクス経済学の活き方』2003年、御茶ノ水書房、第14章：「ヘンリー・マーチンの経済学」大東文化大学経済研究所 Working Paper 25, 2003年5月、のち馬場宏二『もう一つの経済学』2005年御茶ノ水書房、第5章：馬場宏二「マーチン“変説”の探索」大東文化大学『経済論集』第85号、2005年7月。
- (33). *Considerations upon the East-India Trade, 1701. Advantages of East-India Trade to England, 1720.* この二著は書名・副題・出版社いずれも異なるが、本文は全く同じである。後掲(37)のマカロックによる覆刻も本文は同じである。
- (33a). 2006年末にODNBの記載不完全に気付き指摘したところ、同辞典編集部から、ポードリアン図書館で調べた結果ご指摘のとおりだから、今後 *Considerations upon the East-India Trade* をヘンリー・マーチンの著書と記載する旨の返答が届いた。誠実迅速な対応が快い。交信の労を執ってくれた長友三和良一青山学院大学名誉教授に感謝する。2007年1月5日。
- (34). 参照、上記拙稿、『もう一つの経済学』第5章。
- (35). マルクス自らはマーチンを繰り返し評価し引用しながら、マカロック折角の紹介や評価や覆刻を頭から無視あるいは悪罵して著者名や初版名を逸した。その後言及が断続的に行なわれたが、P. J. Thomas, *Mercantilism and the East-India Trade, 1926 op. cit.* の画期的考証もヴァイナーやシュムペーターによって丸ごと無視されて研究がまた途絶し、1983年にマクラウドの考証が出現するに及んで出版後282年目ようやく著者名が確定した。戦後の日本では、久保芳和「『東印度貿易に関する諸考察』にあらはれた匿名者の経済思想」大阪商大『経済学雑誌』21-4/5、1949年11月から西村孝夫『イギリス東インド会社史論』1966年に至るまで計6回ほど紹介・研究があったが、最初の久保論文が最良であった。マーチン研究はその後跡絶え、2001年3月に熊谷次郎「ヘンリー・マーティンの重商主義」『桃山学院大学経済経営論集』42-4が現れるまで35年間関心の外にあった。因に筆者は熊谷論文の内容を知らぬままに同じころから探索を始めていた。
- (36). 参照、上記拙稿、『もう一つの経済学』96~100ページ。
- (37). J. R. McCULLOCH ed., *A Select Collection of Earley English Tracts on Commerce, 1856.* この本はロンドンの経済学クラブで100部私頒しただけで、1952年に再版、一般に市販されたのは1954年である。
- (38). “to the Reader” in *Considerations, op. cit.*
- (39). *The Spectator*, 180, 200, 232がマーチンの寄稿と推定されている。
- (40). *The British Marchant*. ただしこの雑誌の原形は見られず、Charles King ed., *The British Marchant*, 3vols, 1721が見られるだけだから、どこがマーチンの執筆分かは推測によるしかない。
- (41). 輸出入監視官としての報告は、Henry Martyn, Inspector General of the Exports and Imports “His Observations upon the Account of Exports and Imports for 17 Years ending at Christmas 1714”, An Essay towards, Finding, the Ballance of our Whole Trade, annually from Christmas of 1698 to Christmas 1719” in G. N. Clark, et al. ed., *Guide to English Trade Statistics 1669-1782, 1938.* これに相当するダヴィナント監視官の報告文が、Charles D’Avenant, A Report to the Honourable Commissioners, Pt. 1, Pt. 2, december 10 1711, in *The Political and Commerecial Works of That celebrated writer Charles D’Avenant, op. cit.* であろう。
- (42). *Considerations, op. cit.*, p. 14.

Ⅲ-C. カンティロン

マーチンほどではないにしても、カンティロン (Richard Cantillon, 1680-90~1634?) の輪郭も判り難い。アイルランド人でパリで活躍し、銀行業を営んでかなりの蓄財をした後、『商業試論』を

書いたが、急速に忘れられ、出版事情も不詳のまま放置された⁽⁴³⁾。今日でも生没年不確定で、1834年にロンドンで下男に殺されたと言われてきたのが自作の伝説で南米へ移住したとも言う⁽⁴⁴⁾。

著書『商業試論』⁽⁴⁵⁾は1755年の出版だが、おそらく、1730～32年に書かれた英語の手稿をミラボ一に預けておいたのが仏訳され、グルネも関わって出版された⁽⁴⁶⁾。“企業家”の語を使用した嚆矢であり、その他興味深い議論を多々示しているが、当初埋もれたままだったらしい。スミス『国富論』は結構依拠していると見られるが、人名を一度挙げただけである⁽⁴⁷⁾。マカロックの紹介も誤りを含む⁽⁴⁸⁾。その後マルクス『資本論』がある程度考証していた⁽⁴⁹⁾がそれも無視され、1881年にジェヴォンズが発掘した。

さて、ペティとの繋がり。カンティロンは、同書中でペティの名を3回明示し批評している。

まず「ペティ氏は1685年の小さな手稿で、土地と労働との等式による、この平価の関係を政治算術上の最重要問題と考えている。だがこの研究は彼がついでに触れただけのものであって、風変わりな、しかも自然の規則からもかけ離れたものである…」⁽⁵⁰⁾。この「小さな手稿」は特定し難い。1685年といえばペティぎりぎり晩年で、大作はもはやなく、中品の『貨幣小論』⁽⁵¹⁾や『政治算術別論』⁽⁵²⁾でも2～3年前の著作。各地の人口推計の小品を書き散らし⁽⁵³⁾楽しんでいた頃である。「土地と労働との等式」となると、『租税貢納論』を踏まえて『アイルランドの政治的解剖』で論じたことだから「政治算術」ではなく「政治経済学」であろう。違った理由は判らないが、ペティが結構時間をかけて、富の二要素土地と労働の価値的換算を試みていたのだから「ついで」とは言えないし、独創的とは言えても、不自然だと批評される謂れはない。

ついで「サー・ウィリアムペティと…ダヴィナント氏は最初の父アダム以来の諸世代の進展のあとをたどって、人口の増殖ぶりを計算しようと努めているのであるが、私には彼らは自然のコースを大いに逸脱しているように思える。彼らの計算は全く架空のもので、適当に作り上げられたものようである」⁽⁵⁴⁾。ここで批評されているのは『政治算術別論』であろうが、そこでの世界史的人口推計が「架空」のものであることは明らかである。だがこれは、もともと前人未踏の試みで、他にもっと現実的な計算がある訳でもなく、晩年のペティがオアソビとしてやってみせたところ⁽⁵⁵⁾だから、ムキになって批評するまでもない。ペティと一緒に楽しんでいけば良いのである。

最後が「サー・ウィリアム・ペティは1685年のある手稿でしばしば、流通する貨幣は土地の生産物の10分の1に等しいと推定している。…私の意見も彼の意見とそう多くは違わない」「ただ私は貨幣の量を…その価格が毎日変動する土地の生産物と比較するよりは…地主の地代と比較する方がよいと思った」⁽⁵⁶⁾。ここは計算方法を批評しただけで、結論は自説をペティで補強したのである。「10分の1」は『アイルランドの政治的解剖』⁽⁵⁷⁾に出てくるが、同書には1685年版はない。また、流通貨幣量の計算なら1665年の『賢者には一言をもって足る』では⁽⁵⁸⁾総生産4000万ポンドに対して鑄貨600万ポンド、つまり7分の1とし、1682年の『貨幣小論』で別種の計算を示している⁽⁵⁹⁾から、10分の1がペティにとって決定的な数値だったわけでもない。

カンティロンのペティ論評は微妙である。一見批判的だが、実は高く評価していて、それなのにあえて目くじらを立てた風がある。何か心情的な屈折があるのかも知れない⁽⁶⁰⁾。

富の概念。カンティロンは冒頭に言う。「土地はそこから富がひき出される源泉、あるいは素材で

ある。人間の労働はその富を生み出す形式である。そして富それ自体は食料や日常の便利で快適な品々にほかならない⁽⁶¹⁾。ここにペティの名はないが、これはペティの富の二要素説をそのまま言い換えて富実体説と一括したものである。そしてカンティロンは「物の価格と物の内在価値は、その生産において入り込む土地と労働の大きさである」と言い、「土地の価値と労働の価値との平価または関係」については、労働の価値はそれを養うにたる生産物を生ずる土地の価値に等しいとするのだから、結局ペティ説に帰着する。違うのはカンティロンが、この論理に彼独自の企業者概念を含ませたために、ペティには欠けていた利潤範疇が含まれることである。

こうして、カンティロンではペティとの関係が明示されていたばかりでなく、両者の距離は見かけ以上に近い。あるいはペティと重農主義学派はカンティロンによって繋がれていたと解すべきか？

- (43). 以下の知識は、基本的には津田内匠「カンティロン—企業者とディリジズムの経済学」、R. カンティロン、津田内匠訳『商業試論』の「解説」の、恐るべき博搜と高密度の文献考証を含む概説に依拠したものである。
- (44). A. E. Murphy, *Richard Cantillon*, 1986, Oxford, ch. 14.
- (45). (Richard Cantillon), *Essai sur la nature du commerce en general*. 津田内匠訳、1992年、名古屋大学出版会。
- (46). 津田、前掲邦訳、237、245ページ。
- (47). エドウィン・キャナンの考証による。参照、馬場宏二「ペティと『国富論』」大東文化大学『経済論集』87巻2号、2006年7月
- (48). マカロックは文献紹介の中で、『商業試論』には触れず、フィリップ・カンティロンの『産業・商業・銻貨・地金』を挙げて、「スミスが引用した少数の著者の一人」と紹介している。スミスの先学黙殺を掴んだ言い方でそれなりに意味があるが、ここでスミスが名を挙げたのはリシャール・カンティロンであって、フィリップではない。cf. J. R. McCULLOCH, *The Literature of Political Economy*, 1845, p. 52. この点は田淵太一氏のご教示によるが、なお、『資本論』中で事あるごとにマカロックを罵倒していたマルクスが、自らのカンティロン考証に際してこの誤りに全く触れていないのも奇妙である。
- (49). マルクス『資本論』第一巻、第19章「出来高賃金」註(54)。マルクスは、フランス語の『商業試論』が英語からの翻訳と自称しているが、フィリップ著の英語版は、フランス語版より後で書かれたものだと指摘している。完全ではないが当時としてはそうとう深いところまで探索したと言えよう。
- (50). 前掲、津田内匠訳『商業試論』、29ページ。
- (51). ペティ、松川七郎訳「貨幣小論」、大内兵衛・森戸辰男編、久留間教授還暦記念論文集『経済学の諸問題』1958年法政大学出版局、所収。
- (52). ペティ、鈴木信之訳「政治算術別論」。法政大学大学院『経済学年誌』1983年所収。
- (53). petty, *Several Essays in Political Arithmetick*所収の数点。
- (54). 前掲、津田内匠訳『商業試論』55ページ。
- (55). 参照、馬場宏二「ペティの聖書人口学」前掲『もう一つの経済学』第9章。
- (56). 津田内匠訳前掲『商業試論』87ページ。
- (57). ペティ、前掲松川訳『アイアランドの政治的解剖』160ページ。
- (58). ペティ、前掲大内・松川訳『租税貢納論』、170、172ページ。
- (59). ペティ、前掲松川訳『貨幣小論』問25、前掲書115ページ。
- (60). 考え得ることは、ペティがクロムウェルのアイルランド侵略の手先として現地で巨大地主に成り上がったのに対して、カンティロンがクロムウエル侵略で没落したアイルランド・カトリックの子孫だったことである。彼らはフランス政権が、ナントの勅令で流出したユグノーに代わるものとして大量に吸収していた。『アイルランドの政治的解剖』の論評が多いのもそのせいではないか。論理的に共鳴しても情動的に反発するところがあったのではないか。
- (61). 前掲津田訳『商業試論』3ページ。

IV. 『国富論』の先行者達

古典派経済学形成史が厄介になる主因はスミス『国富論』が先行研究を滅多に引用しないことである。一般に引用の習慣がない時代だったせいもあるが、ペティとスチュアートについては意図的隠蔽が疑われ、それが後代に悪影響を及ぼしたことも否定できない⁽⁶²⁾。その欠陥をかなりの程度補ったのが、1904年版『国富論』の編者エドウィン・キャナンの、律儀な出典詮索であるが、彼もマーチンには言及しないなどいくつかの不完全を残した。以下、キャナンの考証にも依拠しつつ、富概念に関わる三人の先行者を拾う。

予め、標的としてのスミスの富概念を要約して置けば、一国の土地と労働が年々生み出す産物、日用品・便益品・奢侈品である。貴金属について富と言う場合もあるが、否定しようとする学説の言い分を紹介しているだけで、自説は再生産される使用価値の集積である。この点、詳しくはVで述べる。

IV-A. ハリス

ハリス (Joseph Harris, 1702~1764) は、鍛冶屋の子として生まれ、造幣局の試金官を勤め、『貨幣・鑄貨論』⁽⁶³⁾を書いた⁽⁶⁴⁾。同書は『国富論』へ多々影響していると見られるが、スミス自身は例によって言及せず、一旦忘却された後、マカロックが『経済学文献分類目録』⁽⁶⁵⁾で高く評価しつつ紹介し、後に名論集の中に覆刻⁽⁶⁶⁾した。ヘンリー・マーチンの場合と類似の扱いである。

キャナンの考証によれば、職業論・分業論・貨幣論中の計9カ所で『国富論』に影響している。スミスが優れた貨幣形成史を書き得たのもハリスを下敷きにしたためである⁽⁶⁷⁾。現行版『国富論』では、他に通商政策論への関わりも注記している。スミスの価値論に、水は使用価値があるのに交換価値がなく、ダイヤモンドは交換価値が高いのに使用価値は殆どないと言う対句があるが、これもハリス由来かも知れない⁽⁶⁸⁾。

しかし本稿で注目するのはキャナンの指摘に含まれない富の概念である。それはハリスの書の冒頭、それも欄外に出てくる。第一章「富と商業との性質と起源について」は、「大地は人間生活を快適に維持するための多様きわまる素材に満ちている」⁽⁶⁹⁾で始まるが、その欄外に「土地と労働があらゆる富の源である」と、手書き体で要約されている。実際このパラグラフは「しかし物のこれほどおびただしい豊富のなかにあつて、大地がわれわれの使用にそのまま適うものを自主的に算出することはきわめてまれである。何ほどかの労苦と勤勞とがわれわれの側に求められる」…「土地と労働とは相ともにあらゆる富の源泉であつて…富ないし豊富は、土地の所有か、あるいは土地と労働との生産物かの、いずれかに存する」⁽⁷⁰⁾で結ばれる。

これはペティ、遡ればホッブズの富概念を継承し、スミスの富概念や、彼の価値論が含む、*toil and trouble*に繋ぐ言説ではなかろうか？ 因みにハリスは富をイタリックで、*wealth and Riches*と書いている。スミスはWealthが多いが、時にRichesも使っている。価値論についてハリスは、物は有用性に応じて価値づけられるのでなく、それを生産するに必要な、土地と労働と熟練に比例して

価値づけられる、と言う⁽⁷¹⁾。水とダイヤモンドのレトリックもそこから出てくる。そして物のこうした内在価値をPrime costと呼び、それは変化し難い、特定の商品の価値は、内在価値が変化しなくとも、需要の強弱に応じて上下する、と言う。

この面でもハリスはペティやカンティロンを継承したと解し得る。そしてスミス説を準備したこと、外見より遙に大きかったと思われる。マルクスはハリスを取り上げなかった。スミスからでは気が付かないが、マカロックによる紹介も覆刻もあった。マルクスのマカロック蔑視が仇になったか？キャナン以後のシュムペーターは、貨幣論の分野で「18世紀最善の仕事」⁽⁷²⁾と評価している。ハリスの経済学史上の地位は、かなり高く評価し直されて良いのではなかろうか。

(62). 参照、馬場前掲「ペティと『国富論』」

(63). Joseph Harris, *An Essay upon Money and Coins*, London, MVCC. LV11. アダム・スミスの会監修、初期イギリス経済学古典選集 13、ジヨウゼフ・ハリス著 小林昇訳『貨幣・鑄貨論』1975年、東京大学出版会。

(64). 経歴・著作は、同上訳書「解説」による。

(65). J. R. McCulloch, *The Literature of Political Economy*, *op. cit.*, P. 163.

(66). J. R. McCULLOCH, ed., *A Select Collection of scarce and valuable Tracts on Money*, 1856.

(67). 馬場宏二「スミスの貨幣論」大東文化大学『経済論集』88号、2007年3月

(68). ハリス、前掲小林訳、5ページ。

(69). ハリス、前掲邦訳、1ページ。

(70). 同上書、2ページ。

(71). 同上書、5～6ページ。

(72). シュムペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史』、609ページ。

IV-B. スチュアート

スチュアート (Sir James Steuart, 1712～1780) の『経済学原理』⁽⁷³⁾は小手先で扱えるような代物ではない。時に難解になる文体で綴った大冊であるせいもあるが、ともあれ「経済学 Political Economy」を書名に掲げた初の体系書である。数値に関してペティとダヴィナントの名を数回挙げているから学説史的繋ぎの意味もある。体系的に取り扱うに価する。刊行は『国富論』に先立つ9年、実際にはスミスに少なからず影響を与えているのに、『国富論』では表面上完全無視された。キャナンの出典詮索もスチュアートの影響を検出し得なかった。スミスが意図的にスチュアートを無視したことは今日明白⁽⁷⁴⁾となり、現行版『国富論』⁽⁷⁵⁾になってようやく影響が注記された。だがそうやって見ると、注記は30箇所を越えるのでこれまた簡単には整理できない。

そこで本稿では、当初の目的に従って、論点を極端に絞る。すなわちスチュアート自身の富概念と、それがスミスに与えたと覚しき影響の検出である。スチュアートの富概念は、富は貨幣だと言うものである。いささか単純化し過ぎだと言われるかも知れないが、『原理』第1編第6章を見れば明白である。ここではまず、奢侈と貨幣について定義する。貨幣は物質的用途をすこしも持たないが、価値の普遍的尺度になり、譲渡し得る何物にたいしても適当な等価物となるような、評価を得た何かの商品だと言うのである⁽⁷⁶⁾。その後この章で、貨幣所有者は新しい種類の富の所有者だとか、想像上の富すなわち貨幣とか、貧者の野心をかき立てる富の魅力（富裕者の奢侈の代価の意味）とか、富は神だとか、彼の定義に合う貨幣が富と言い換えられている。同様な用法は後の章でも繰り返

返される。もっと後の、第2編第26章には、改めて富の定義が出てくる。「富とは、この流通する適当な等価物だ」⁽⁷⁷⁾。判じ物みたいな文句だが、「流通する適当な等価物」は彼の貨幣の定義に含まれる概念である。そして、ここで「流通」するモノは、上層階級の奢侈欲望を満たすために下層階級、製造業に従事する自由な勤労者、が提供するサービスのことである。つまり、下層民の労働の成果を貨幣によって購入することである。判じ物の「富」は、上層階級が持つ貨幣に他ならない。

富が使用価値の堆積だとする把握は見当たらない。だがそれなら生産物に対する考察がないかと言えば、第2編第21章では、消費財を生理的必需品とそれを越える奢侈に分け、必需品には政治的必需品もあると、結構的確な指摘も行っており、他方第4章で、財貨の価格の中に、真実価値と譲渡利潤とがある、真実価値は、その物を生産する労働の生産性を前提に、労働者の生活費と道具費、および原料費からなる。利潤はこれを越える価格であると、価値論としてもかなりの水準に達した議論をしている。

それなのに富貨幣説である。これは明らかに、重商主義の富概念への回帰である。彼の体系が最後の重商主義と呼ばれる、その一環である。需要重視のケインズ主義の先取りともされるが、それもうなづける。

この項の括りに、スチュアートの議論が、スミスの富に関する学説史に奇妙な歪みを与えたのではないかとの仮説を述べておく。スミスは「商業についてのもっともすぐれたイングランドの作家のうちの何人かは、一国の富はその国の金銀だけでなく、その国の土地家屋、あらゆる種類の消費財であると述べつつ、論をはじめ。ところが論を進めていくうちに、土地家屋、消費財は記憶からおちこぼれ、…しばしば、すべての富は金銀である…と想定するようになっている」⁽⁷⁸⁾と言う。これは明らかにおかしい。こんな議論をした個人が何人も居たとは思えない。のみならず学説の流れから言えば、逆に金銀重視説が減ってきているのである。ここを、スミスがともかく名を挙げたダヴィナントやカンティロンの富概念から、彼が意図的に無視しつつ内々批判したスチュアートのそれに学史風に繋ぐとこう言えることになる。スチュアートの富貨幣説はスミスの富消費財説とは相反する。名を挙げず真の論敵を非難するには、この論点は効果的である。スミスのこの心情が、こうしたありもしない学説史を書かせたのではないか。

(73). Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 1767. 中野正訳『経済学原理』、岩波文庫。

(74). パルトニー宛の手紙による。参照、馬場前掲「ペティと『国富論』」。

(75). Adam Smith *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 vols 1976, Oxford edition.

(76). 前掲中野訳『経済学原理』(一)、115ページ。

(77). 中野訳『経済学原理』(三)、36ページ。

(78). アダム・スミス著、水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(二)、295ページ。

IV-C. チュルゴ

チュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727~1781) を本稿に含めるかどうか、いささか迷った。『資本論』に何回か引用されていたことの他ほとんど知らなかった。『国富論』では名が挙がっても

いない。キャンナンの出典詮索にもチュルゴは全く登場しない。

ところが彼の主著は「富の形成と分配にかんする諸考察」である。ひよっとすると『国富論』の富の字はチュルゴの富に由来するかも知れない。そこで『国富論』200年記念の現行版『国富論』の注解⁽⁷⁹⁾、ロスの『アダムスミス伝』⁽⁸⁰⁾、それにアダムスミス文庫目録⁽⁸¹⁾を調べて見ると、どうやらスミスはチュルゴと深く交流していたらしい。そこで改めて邦訳⁽⁸²⁾を当たって見た。

「諸考察」は、重農学派的表現を確かに含むものの、それを越えて歴史的・論理的に整理された経済学体系を、いわば研究会報告のレジユメのような簡潔な文体で述べており、各所に魅力的な考察を含んでいる。特に、カンティロン譲りの「企業家」の概念を組み込むことによって企業家と資本家を区分するとともに、利子との対比によって利潤範疇を明白にしている。この点などは、英語にまだCapitalistの語がなかったという制約があった⁽⁸³⁾にしても、スミスの方がより積極的に学び取ってもよいところだった⁽⁸⁴⁾。これに加えてとりあえず連想として言うておけば、チュルゴの土地分配論や奴隷制度論を含む歴史段階論はスチュアートに類似の議論があり、あるいはその先駆だったかもしれない。工員論はスチュアートの自由労働者論に、ひいてはスミスの都市・農村論につながるかも知れない。無論この種の連想を考証して詰める余力は今ない。そこで、本題の富概念に戻る。

チュルゴが富概念を定義的に明示しているわけではない。しかし、富という語の用例から見ると、大きく3種になる。第一は土地そのもので、重農主義者らしく、土地所有がすべての前提になる。第二は彼が「動産の富」と一括するもので、家具・家屋・食器類・貯蔵商品・道具類・家畜。その一定の貯えが企業が成立する前提になる。第三が貨幣。ここまでで既に『国富論』の富概念を予示しているといっても良い。だが貨幣の説明にはさらに注目すべきである。

商業における必要から、諸商品の価値を測定し代表するものとして貨幣が成立し、金銀がその物的性質から貨幣となるが、それはまた富の蓄積のために最適で、ここで富が貨幣になる、と言う。のみならずその前に、どの商品も価値を測定し代表するから、すべての商品は貨幣であり、貨幣はすべて本質的に商品であると、価値形態論の根本を言い当てた議論がある。チュルゴによれば、貨幣は蓄積されやすいので、動産の富のうちでもっともとめられるものになる。土地も動産も貨幣で測定し得る価値を持つ。蓄積された価値が資本である。その資本の用途として、企業に対する貨幣の貸付けがあり、その代価として利子が支払われる。

こうして企業家と資本家、利潤と利子の明快な弁別が述べられるに至るのだが、富概念としても飛び抜けて高い。土地・動産・貨幣の間に互換性があることが明示されている。「あらゆる種類の価値が貨幣を代表するように、貨幣はあらゆる種類の価値を代表する」⁽⁸⁵⁾。富は資本に他ならず、資本は自己増殖する価値体なのである。『国富論』の構図を予示したばかりか、古典派を突き抜けた把握だったと言って良いのである⁽⁸⁶⁾。

(79). R/H/Cambell & A. S. Skinner, W. B. Todd ed., Adam Smith, *An inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1981, Liberty Fundに、チュルゴに関する注解が計10箇所あるが、P. 672～3では交流について述べている。いわく、スミスはチュルゴ「諸考察」の初めの二部を含む『エフェメリード』誌を持っている。スミスはパリ滞在中にチュルゴと会っているが、チュルゴが「諸考察」を執筆中だったから、共通の関心事を語りあった。このことは、商業理論、銀行、公信用等についてエルヴェシウスの家で

何回か語り合ったというモレの回想録によって裏づけられる。スミス自身、ヒュームへの手紙で、チュルゴは貴方に相応しい友だと述べている (cf. Adam Smith Correspondence, P. 113) 云々。

- (80). ロス (I. S. Ross) 著、篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』、2000年、シュプリンガー・フェアラーク東京社には、スミスが『道徳感情論』をチュルゴに贈呈したとか、租税論の希観本をチュルゴの好意で入手したといった交流が述べられており、理論的にもチュルゴの貯蓄論・資本論がスミスに影響していると指摘している。同書、211、374、319ページ。
- (81). Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library Catalogue*, 1998, Oxford. が、チュルゴの「諸考察」をスミスが英訳したという説があることを示している。この説について、I. C. Lundberg, *Turgot's Unknown Translator*, 1964は、一冊を挙げて考証に努めているが、肯定には至っていない。スミスがチュルゴと交流があり、理論的に吸収するところがあったことがわかれば良いのである。
- (82). 「富の形成と分配にかんする諸考察」津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』、一橋大学経済研究叢書12、岩波書店、1961年所収。
- (83). OEDによると、英語でCapitalistの語が現れるのは1792年刊のアーサー・ヤング『フランス紀行』が最初である。
- (84). スミスはUndertakerの語を企業者の意味で多用し、葬儀屋の意味で一度だけ使っているが、いずれにしろ『国富論』の索引には拾っていない。参照、馬場宏二「『国富論』の“企業家”」大東文化大学『経営論集』12号、2006年9月
- (85). 前掲、津田訳、95ページ。
- (86). シュムペーターはチュルゴを全体として高く評価し、多くの先駆的貢献を丹念に指摘している。全体系的にも、われわれとは視角が異なるにも関わらず、「チュルゴの理論的骨格は、その先行性を別にしても、なお『国富論』の理論的骨格よりも明白に勝っている」と類似の評価を下している。前掲『経済分析の歴史2』、517ページ。

V. 古典派

以下でスミス・リカードの富概念を取り上げる。『国富論』については、富概念に立ち入る前に用語法にふれる。書名から見ても富がキーワードであることは疑いないから、まず用例を整理しておこうというのである。

V-A. 『国富論』の富

書名の「富」はWealthである。現行版『国富論』で拾うと、この語は15回出てくる。これは使用頻度の高い語のうちに入るが、最多ではない。管見の限りで、Undertakerが20回くらいは使われている。スミス生前の版ではこれを索引に全く拾っていないのに、political Economyは実際の使用回数以上に拾っているという差がある点にも注意を要する⁽⁸⁷⁾が、ここではまず、書名に用いられた最大のキーワードWealthが、実は最頻出語でないことに、注目しておく。

もっとも、富を意味する、あるいは富と訳せる類義異語はいくつか使われている。Richは形容詞の場合と名詞化した場合で計5回はあり、Opulentも目に止まった限りで2回、他にMan of fortuneのように「富める」と訳せる語もあり、enrichも使われている。だがそれらを含めても「富」が最多にはならない。企業家のばあい、すでにUndertakerが最多であったが、他にProjectorが数回用いられ、時にはSpeculatorも企業家と訳せるからである。

スミス生前の第3～第5版の索引を、ひとまず著者の意向を反映したものと推定する。その中で、Political Arithmeticは、実際には2度使われているのに全く拾われなかった。隠蔽したかに疑わ

れる。Political Economyは、索引では計11表示されているが、this systemといった代用語まで含んでいるので、そこに含まれる実際の用例は5回ほどだから、こちらは誇示である。後にキャンナが用例を律儀に拾って、さらに12追加した。Undertakerは実際には最頻用語だったにも関わらず全く拾われず、キャンナ版に至っても葬儀屋の意味の一方所が拾われたに留まる。このことの意味は筆者程度の英語力では解明しきれないが、あるいは黙殺かとも疑える。「富」は生前版では実際の用例の三分の一ほどが拾われているだけだが、書の主題であり書名に出ているのだから、隠蔽ではなからう。だが、スミス生前版で拾ったのは、日常語では富は貨幣と同義に用いられる、ダットン人は家畜数で富を表現する、富は権威の一因だ等、いずれにせよスミスの富概念からすれば周辺的な意味を示す用例だけである。このことが何を意味するのかすぐには判らない。以上を予備操作として、概念論に移ろう。

(87). 馬場宏二前掲、『『国富論』の“企業家”』

V-B. スミスの富概念

『国富論』の冒頭に「すべての国民の年々の労働は、その国民が年々消費するすべての生活の必需品や便益品を本来その国民に供給する基金であって、そうした必需品や便益品はつねにその労働の直接の生産物であるか、あるいはその生産物で他の諸国民から購入されるものである」という周知の一文がある。これは、労働投下による社会の再生産を捉えた認識として高く評価されて良いが、言うまでもなく、ここで挙げられた「生活の必需品や便益品」は使用価値の堆積を意味する。これがスミスにとって富の実体に他ならない。「富」の用例の側から挙証しよう。

本論におけるwealthの最初の用例が地代論第3節の「ヨーロッパの実質的富、すなわちヨーロッパの土地と労働の年々の生産物」である。冒頭一句と照らし合わせれば、これがスミスの富概念の機軸であることは明白である。これとほとんど同じ表現が本文中に計5回、極めて近い表現を含めれば7回⁽⁸⁸⁾はある。他に、単に「土地と労働の生産物」と簡略化した表現はかなり多いから、用例の頻度から見ただけでも、これがスミスの富概念だと言って良い。richの語でも同様な把握が示されている。これといちおう別だが、土地を富のもっとも重要で耐久的部分と述べてもいる。こうして、「富」の用例の過半が、土地と労働の年々の産物で、必需品・便益品・娯楽品、つまり消費財から成ると言うのである。

この用法について、キャンナがカンティロン『商業試論』の冒頭一句との類似性を指摘している⁽⁸⁹⁾。とすればこれは実質的にはペティの富概念に遡る。キャンナが挙げなかったハリスの冒頭一句もやはりペティに遡り得る。因みにスミス自身は、この際の先行3者のうち、カンティロンの名だけを一度挙げたにとどまる。

ところで、これ以外の周辺的な「富」の用法⁽⁹⁰⁾は、これも既に見たように貴金属・貨幣を意味するもので、スミスが批判する見解の紹介である。その際スミスが、富に関する学説史を、貴金属・使用価値の二本立て説から出発しながらいつの間にか貴金属説に縮小した人が何人もいたとの、歪んだ擬人法で描き、それがおそらくスチュアートを名前を挙げないで批評するというスミスの捻じ

れた情念に由来するだろうことも、既に触れた。

スミスの説は、一般には総合性を持つが、独創的と言うより、名を挙げない多くの先行説から取捨選択した、それも時に奇妙な屈折を含む、合成説であるように思われる。

- (88). 用語の分布は、キャンナン版『国富論』の索引を見れば、スミス生前版の索引も含めてほぼ判る。英語の現行版、*Wealth of Nations*, 1981, *op. cit.* の索引も大差ない。ただし、邦訳各版中、現在もっとも流布しているであろう、水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』岩波文庫には、キャンナン版に依拠した索引がなく、「富」の項もない。取り急ぎこの訳本の「富」の所在を、大まかに示しておく。分冊～ページで略記する。
(一)～63、(一)～419、(一)～430、431、(二)～121、(二)～133、135、(二)～297ページ。
- (89). アダム・スミス著、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』（キャンナン版の邦訳）岩波文庫～150ページ。
- (90). 前掲水田・杉山訳岩波文庫版『国富論』（一）～414、（二）～259、260、（二）～294、295、（二）～373、（三）～101ページ。

V-C. リカードの価値と富

リカード (David Ricardo, 1772～1823) の『経済学および課税の原理』⁽⁹¹⁾ は、『国富論』の内面的批判を伴う全面的継承を志した成果であり、絵に描いたような経済学の発展の現れである。リカードは同書の「序言」で、経済学を大いに発展させた人として、チュルゴ、スチュアート、スミス、セイ、シスモンディを挙げた。マルサス、ウェストも同様に扱ったと見て良いが、セイやシスモンディやマルサスは経済学がリカードと同時進行していた同時代人である。先行者にチュルゴとスチュアートを挙げているのは、もともと学者でなく先行学説にさほど詳しくなかったであろうリカードが、同時代のマルサスやシスモンディを越え、先行するスミスを遙に越える、知的誠実さを保っていたことの現れと解し得る。

さて、『原理』の第23章は「価値と富、それらの特性」と題されている。主題に関する J. B. Say との論争文であり、現行『原理』第3版は、おそらく初版から含まれていたであろうセイ批判を、セイが『経済学概論』第4版⁽⁹²⁾で意見か表現を変えたことに対応した、文章上の変更を含むものと見られるが、基本的論理は変化ないと考えてよかろう。

そこでリカードが、説得のために手を変え品を変えて繰り返す主張は、極めて透明に整理されていて、価値と使用価値はスミスが交換価値と使用価値と区別したように異なる概念であって、生産力が上昇すれば使用価値つまり富はそれに応じて増えるが、価値は投下労働量が変わらなければ変わらず、単価は生産性に反比例して下がる、と言うものである。

リカードによれば、セイは生産性が上がると富と価値が同時に上がると言うが、効用が価値を決めると考えているからである。だがそれでは（循環論法になり）混乱する。もしセイが言うように富と価値が同じであるなら、価値の増えた商品の所有者は確かにそれと交換にヨリ多くの富を入手出来るが、それでは各人の富が引き出される一般的資本（ストック）がそれだけ減ることになるから、他の人々はそれだけ分け前が減る。ローダーデイル卿が言うように水を希少にし誰かに独占させるなら、その人の富は増加するが、その国では富の分配が異なってくるだけでなく、富の実際の損失が起こるであろう。

リカードは価値と使用価値の区別についてはスミスを全面的に継承した上で、価値についてはス

ミスが残した錯綜を投下労働価値説一本に整理した。そのリカードについて改めて富は使用価値か貨幣かといった詮義立てをする必要もなからう。この第20章は、実は改めて必要な新展開ではない。同時代の有力なスミス普及者セイが効用価値説を採り、リカードに反対しつつ混乱していたことを指正しただけの、オマケの章である。

この章で多少注目するとすれば、富という語の原語の使い分けである。リカードは、一般にはRichesを使っている。これはあるいはセイのフランス語richessに合わせただけかも知れない。しかし彼はスミスのwealthも充分承知しており、実際にこの章内でいくつか使っている。国の富、総量としての富を述べる際にwealthが用いられるようである。個別の富にrichesを使い、こちらではwealthを用いていないようである。筆者の英語力では解明出来ない使い分けか、あるいはこうまで深読みをする必要もないのか。そこは不明である。

(91). D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation*, 1817, 3rd ed. 1821.

(92). J. B. Say, *Traité d'économie politique*, 1803, 4me ed. 1819.

むすび

以上の考察を踏まえて、可能な限りで富概念の系譜を描いて見よう。この場合、系譜とは継承関係が資料的に明白であることを意味する。先行学説に意識的に対応したことが継承者自身の文章で明示されていれば当然系図に書き込める。それがなくとも学問的に誠実な第三者が、何らかの物証を伴いながら継承関係を挙証していれば系図に入れて良い。ただ、実際にはそれ以外のケース、論理や用語の共通性や類似性だけでも、系譜が存在する可能性は否定出来ない。

さて、取り敢えず重商主義の富貴金属説から出発する。後期重商主義の同時代人だったペティは、貴金属説と消費財説を併記した。富の実体に関するこの概念は、ダヴィナントとマーチンが、重心を消費財に移す形で継承した。だがペティは、富が土地と労働の産物だと言う、富要因論も合わせ持っていた。これはカンティロンが、そしておそらくハリスも、直接に継承した。カンティロンとハリスを経由したペティの富概念を、スミスが暗黙に継承したことはまず疑いあるまい。もっとも、ペティ説の起源がホップズにあったからには、断片的要素の継承はロックやヒュームらの社会哲学を介して行われたこともあり得るが。

土地そのものが富であるとの認識は、特に経済学的考察を要しない。ペティ・重農主義学派・スミス。継承関係がなくともこの順で出現しそうだが、継承者が先行学説によって自説を確認する意味はあったろう。

厄介なのはスチュアートとチュルゴである。スチュアートは富の実体に関しては単純な貨幣説で、重商主義へ直接遡る。なぜそうなったかの方が不思議だが、これは逆説的な形でスミスに投影され、その富学説史に奇妙な歪みを齎した。

チュルゴの理論的水準は飛び抜けて高い。それだけに富概念も複雑になる。土地・動産・貨幣。前二者は貨幣的に評価し得るが、貨幣自身も富として資本の自己増殖運動の一環となる。動産の富はスミスの資本概念に吸収されたが、貨幣はスミスには掴み切れなかった。古典派経済学の生産主

義があったためである。それを乗り越えるにはマルクスが必要だったが、実はマルクスもなお不
分で、マルクスを継承彫琢して、経済原論が流通形態・生産過程・分配機構の三部構成によつて説
かれるとした宇野弘蔵の、流通形態論の成果を持ち込まねばならない。それによれば、そもそも重
商主義は流通形態論に踰躓し、生産過程論を見失っており、古典派経済学はその反動で流通形態を
過度に軽視した。チュルゴは、重商主義の富貴金属説が貿易差額説の形で資本の自己増殖を捉えて
いたのを、不十分ながら生産過程論と結合させる方向で復活させていたのである。

2006年12月11日－2007年1月4日